

## 支部長挨拶

(公益社団法人) 日本気象学会北海道支部 支部長 山里 平

会員の皆様には、日頃より気象学会北海道支部の事業運営にご協力をいただきお礼を申し上げます。

このたび、6月12日に開催された日本気象学会北海道支部の平成30年度第1回理事会において、第31期の支部長を仰せつかりました。皆様からのご支援・ご協力をいただきながら、北海道支部の発展のために微力ではありますが最善を尽くしたいと考えていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

今年7月の西日本を中心とした記録的な豪雨による災害は200名を超す犠牲者を出す大惨事となりました。近年は極端な気象が多くなっています。昨年度の九州北部豪雨を始め、全国的に大雨等による甚大な災害が発生しており、北海道でも、一昨年の7月下旬から9月上旬にかけて、台風や停滞前線による記録的な大雨で河川の氾濫や土砂災害による甚大な被害が発生したほか、昨年の冬期においては、上川地方北部の幌加内町で、積雪の深さが北海道の極値を更新するなど各地で大雪による災害が発生しました。今年度の西日本での豪雨に先立ち、台風第7号によって北海道でも河川の氾濫による被害が発生しています。

気象災害が激甚化する中で、進展するIoT、AI等の技術を活用しつつ、安全・安心な社会を構築するために、諸現象のさらなる究明と予測精度の向上が求められ、気象学会の役割は重要となっています。昨年10月30日～11月2日に北海道大学を会場として4日間にわたり開催された日本気象学会2017年秋季全国大会では、全国各地から多くの会員の方々がお集まりになりました。発表件数は一般講演445件、専門分科会89件の合計534件、参加者数は803名となり気象学への関心が高まっていることが伺えます。

さて、日本気象学会は公益社団法人と認定されて6年目を迎えました。今後もその趣旨に沿った活動として、分野の異なる研究者がそれぞれの力を学会という枠組みの中で出し合い、学術及び科学技術の振興及び気象学の進歩を通して社会へ貢献していくことが必要です。特に、広い分野・さまざまな角度からそれぞれが連携して研究、教育、応用を進めていくことは、気象学会のまとまりと、会員の裾野を広げるためにも重要であり、このような考えを念頭に、これまでの取り組みを引き続き継続・発展させたいと考えております。

学会員には大学等の研究者、気象サービス会社、市民の方など多様な方がいらっしゃいます。支部としては、学会員の交流がさらに深められますよう、学会活動の情報交換や情報発信をしていく所存です。この機関誌「細氷」も2016年に完全に電子化することとし、昨年2017年7月に支部ホームページから閲覧が可能となりました。カラーページをふんだんに使うなどその利点を活かした記事となるようになりました。会員の皆様にはその利点を活かした形での投稿、利用をお願いしたいと思います。

会員の皆様には、益々のご配慮とご鞭撻を賜りますようお願いして、ご挨拶といたします。

(札幌管区気象台長)

